

革嶋館跡の調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



室町時代から江戸時代の調査区 (北東から)

はじめに 京都市西京区川島玉頭町で、宅地造成工事に先立ち、かわしまやかた 革嶋館跡の調査を実施しました。2009年9月と10月の2回にわたって発掘調査を行ない、中世の堀や土坑などを発見しました。

調査地は、山城国葛野郡革嶋荘を本拠とする領主革嶋氏が住んでいた館跡です。革嶋荘は近衛家の荘園で、平安時代末期まで遡るとされます。荘園には年貢を集めるため、平安京から役人が派遣されていましたが、その中には地元

根付いていた者もいたでしょう。革嶋氏もそのような役人の一つだったと思われ、地名を冠して、やがて革嶋と名乗るようになりました。当初は荘園経営の事務管理を行なう政所屋敷がありましたが、中世には堀と土塁で防御する館へと姿を変えたと考えられています。

革嶋氏が鎌倉時代から代々残してきた『かわしまけもんじょ 革嶋家文書』(京都府立総合資料館所蔵・重要文化財)の江戸時代中期の絵図には、革嶋春日神社と館が土塁と堀に囲まれて描

かれています。今回の調査地は堀と土塁が示されている館の南東と南西の一部です。絵図に描かれた



革嶋館跡の位置



堀1 (北から)



堀2 (東から)



堀3 (南西から)

館の堀と土塁を確認し、革嶋館の実態を明らかにすることを目的に調査を実施しました。

調査で明らかになったこと まず、調査区北側では、地表下0.7～0.8mで、南北方向の堀1を発見しました。堀の時期は室町時代後期から江戸時代で、規模は東西約5m、深さ2mで、南北6m分を確認しました。堀は、さらに調査区外に伸びていました。また、堀1から約7.5m東にも、南北方向の堀2が残っていることもわかりました。

堀2は、幅5.5m・深さ1.6～1.8mで、絵図に示された館の東限の堀と考えられます。調査区の南部で西に屈曲し、西側47mの位置にある南西方向の堀3につながるものが明らかになりました。

さらに、堀1の西側では館内の施設とみられる井戸・集石遺構・柵・柱穴群などが見つかりました。

調査で出土した遺物は、室町時代から江戸時代の土器類が中心ですが、堀2の埋土からは江戸時代の瓦類が多く、建物の軒先を飾る軒瓦もみられます。また古墳時代直前の土器類も出土しています。

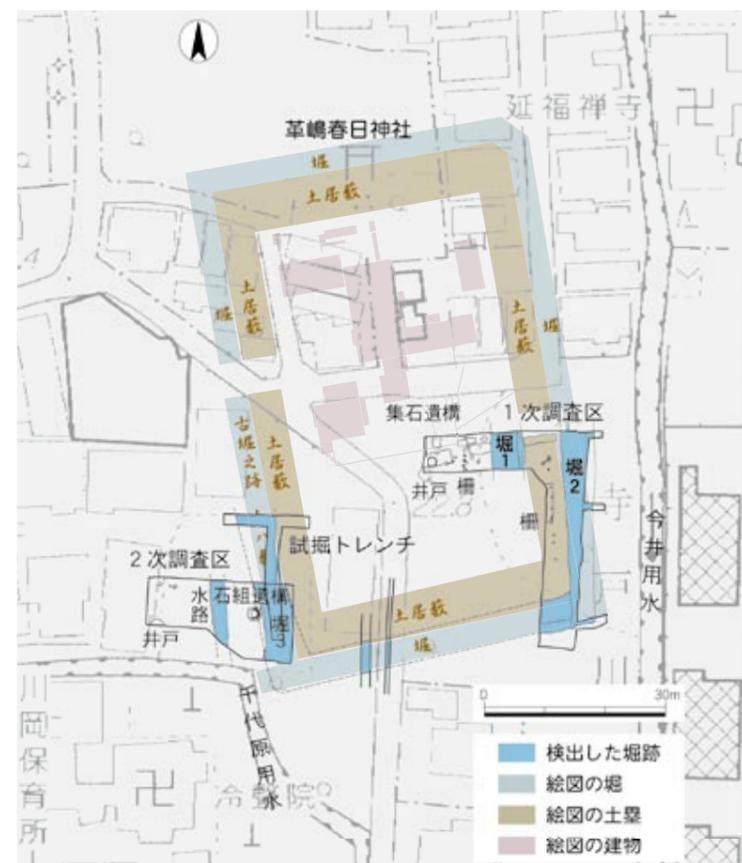
また、下層には古墳時代の遺構が残存していることが明らかになりました。

まとめ 堀2・3は、江戸時代の絵図に示された革嶋館の東と南を区画する堀と考えられます。土塁については堀3の東に基底部が残っていましたが、近年まであった竹藪の土採りなどにより削平さ

れてたようです。

堀1は内堀と考えられますが、調査区外の南側の状況が明確でないことなどから、今後の検討課題です。堀1西側の室町時代の井戸・集石遺構・柱穴などは、館内部の建物配置や施設の状況を考える上で重要な遺構です。

(加納敬二)



室町時代の遺構と絵図の堀と土塁